

015188

南京戦史

財団法人

偕

行

社

「南京戦史」発刊に当たりて

理事長 原 多喜三

南京戦の定本として、この度漸く偕行社刊『南京戦史』が完結し、会員の皆様にお届けできることになりました。

昭和天皇も崩御せられて、平成と元号も改まりました現在、南京戦は既に半世紀以上も前の出来事であります。満洲事変、支那事変、大東亜戦争と続いた昭和前半の出来事は逐次忘却の彼方に押しやられ、徒らに軍に対する一方的非難の声のみが残っている中で、その声の代表的なものの一つが南京戦であります。

皆さんの子弟が使っている学校の教科書を一度ご覧下さい。それには南京戦に於て日本陸軍は二十万、三十万もの大虐殺を行ったと書かれていますのであります。これは戦後、勝者が敗者を一方的に裁いた極東国際軍事裁判に於て、所謂「南京事件」なるものが捏造せられ、反論すべき陸軍は既に無く、その間の真実を伝える権威ある戦史の整備もないことをよいことに、真相不問のまま一方的証言に依りそれが決定づけられ、マスコミまたこれに追従し、大虐殺が何時の間にか定説らしくなってしまったからであります。

このような時、ここに会員有志および部外同愛の士の協力に依り、現時点に於て最も真実に近いと信じ得る定本を発刊できましたことは、まことに意義深いことと喜びに堪えないところであります。ひろく会員の皆様のご高覧を頂き今後更に本問題の研究を進められるうえの基礎資料として御利用戴きますようお願い申し上げる次第であります。

最後に本書刊行に当たり御尽力を戴いた関係各位、特に部外の方々に對し深甚なる謝意を表します。

平成元年十一月

はじめに

南京戦史編集委員会代表 高橋 登志郎

南京戦は昭和十二年十二月支那事変の初期、我軍が敵国首都南京を極めて短期間に攻略した戦いであります。しかし何故か今日迄南京戦の本格的な戦史は刊行されておりません。そして目につくものは所謂「南京事件」に関する本ばかりであり、それも大部分は右か左に極端に偏して、公正な見方に欠けているように思えます。

私共編集委員会はまず南京攻略戦について、参戦諸部隊がどのような行動をとって南京を攻略したのか、そして攻略後は何処で何をしたのか、その時の状況はどうであったのか、五十年前の正しい状況を再現することに努力しました。当然のことながら「南京事件」についても、必然的にその真実の姿に迫らざるを得なくなりました。その集大成が本書「南京戦史」であります。

以下本書刊行の目的、編集方針、要領、その他執筆編集に当たられた方々等について御説明申し上げます。

一、刊行の目的

- 1、本書刊行の第一の目的は、南京攻略戦、およびその占領直後南京およびその周辺に於て、我軍は如何に行動し、何をしたかを明らかにして、会員各位に南京戦及び所謂「南京事件」の実相を、把握して戴くことにあります。
- 2、第二の目的は学校の教科書等に記載されている「南京事件」の誤った記述を、是正してもらう根拠を提供することにあります。
- 3、目的の最後は、南京戦に参加した将兵が兵馬倥傯の間に書き記した貴重な日記や、南京戦に関係ある当時の公文

書、すなわち作戰命令、戦闘詳報、陣中日誌等のみならず、中国側の資料等、双方のいわば一次資料を可能な限り収録し、永く後世に残すとともに、本問題に関心を有する会員、および一般の人々の今後の調査、研究に便ならしむるためであります。

二、編集方針

本書編集の方針は、戦史、すなわち歴史書として、後世の史家の批判にも堪え得るよう、可能な限り学術的に価値ある本とする、ということであります。

史実は一つしかありません。一つしか無い史実は思想的あるいは政治的理由に依って、往々にして歪められます。私たちは一つしかないその一つを、再現することに全力を尽くしました。すなわち最も信憑性のある第一次資料に依ることを第一条件と致しました。そのため我々としては公表を憚りたくなるようなものも、敢えて採り上げ収録しました。その意味では本書は今年五月までに得られた一次資料によって、現時点で最も真実に近づき得た戦史であると思っております。

三、編集要領

本書は御覧の通り二部より成っております。第一部は戦史本文、第二部を資料集としました。以下各部の概要を説明いたします。

第一部 南京戦史

第一部全七章は畝本正巳氏がさきに『偕行』誌上に連載した「証言による南京戦史」に、新しい資料を加えて改訂

したものをいわゆるタタキ台とし、それを委員会の全員が次々に現われた第一次資料を採り入れて加除訂正のうえ、さらに委員全員で校閲、検討し修文したものであります。

1、第一章より第五章まで

上海の堅陣を抜いた方面軍が如何にして南京を攻略したかを、歩兵各部隊の動きを中心にして時系列を追って書きあげたものです。これにより各部隊が何日、何処で如何に戦闘したかを概ね把握できると思います。

2、第六章、第七章

いずれも「南京事件」に密接に関係する章であって、事実は事実として余すことなく記載されております。特に第六章の「南京防衛中国軍七万の行方」と第七章「スマイス調査」は「南京事件」の数の問題に対する答に相当するところで、今日までに得られた一次資料に依る最も真実に近いものと信じております。

3、証言について

参戦者各位より寄せられた多くの証言は、畝本氏執筆の原動力となりましたものでありますが、一次資料との関係もあり割愛したものが多々あります。

4、数字の判断について

本戦史は基本的に一次資料に依り書かれたものであって、我々の推測を排除してまいりました。しかし第二章、第六章の兵力等の数字についてのみ、一次資料の数字は当然あげておりますが、我々の推量も入れてあります。たとえば南京防衛の中国軍の兵力もその一つであります。これは極めて重要な数字ですが、決定的な一次資料が今の処発見されていないためであります。

5、総括について

本戦史は前述の通り真実に一歩でも二歩でも近づくべく努力したもので、我々は檢察的見方も、また弁護側につきこともしておりません。

従って本史の総括は本書全部を読まれた方が、御自分でなさって戴くこととし、委員会としては総括をしておりません。

第二部 資料集

本書の基礎をなす一次資料を、紙幅の許す限り収録したもので、その内容は当時の作戦命令、通牒、戦闘詳報、陣中日誌等の公文書、および当時参戦した松井軍司令官以下士官、兵に至るまで、戦陣の兵馬倥傯の間に書き記した貴重な日記、さらには当時の中国側資料、ならびに参戦した部隊の編成表等であります。

1、参戦者の日記

日誌は既に公開を了承されている方々を除き、全部御本人または御遺族の御承諾を得たものであります。

日記は極力全文を掲載すべく努力しましたが、紙幅の関係で一部割愛した所もあります。特に昭和十三年一月以降の記事では、関係のない部分を省略したのもあります。

2、「中島日記」について

難解で有名な中島中将の日記は、御遺族の中島知行氏より一任されている青山学院短期大学教授・木村久邇典氏の御厚意に依り、既に解読されているものを拝借させて戴きました。解読された方は、十二月一日より十日まで、および一月元日より二十五日までの分は村上敦子氏であり、十二月十一日より三十一日までの分は出 綾子氏であります。本欄を借り木村教授ならびに村上、出両氏に厚く御礼申し上げます。

3、編成表について（別紙としてはさみこみました）

編成表は、各部隊毎に若干時期を異にして居り、とりわけ大・中隊長が戦死され、次々と交代しておられるため或いは本文に出てくる方が編成表に明記されていない場合もあるかと思ひます。また師団により精粗があります。

四、完成までの経緯

私共が定本作製のスタートを切って四年半、当初は試行錯誤の連続で、右往左往しましたが、何十回にも及ぶ大小様々な打合わせを経て漸く構想もまとまり、はっきりと方針を打ち出したのは一昨年のことでありました。爾来二年有余、入手した一次資料の解読、調査、取捨選択、原稿の作製、検討等、さらには偕行社の役員その他の方々への供覧等、各委員とも多忙を極めました。

その間にも次々と無視できない資料が発見され、その都度討論、修文が続きましたが、特に昨年末には貴重な中国側の一次資料が手に入り、南京防衛の中国軍兵力数の修正を行い、また中国軍の動きその他従来不明の部分が一部判明し、関連各章を修文する等、最後まで真実究明に全力を尽くしました。最終的タイムスケジュールが組まれてからは特に校正、索引作り等で、委員以外の方々の御協力も得て完成に漕ぎつけたのであります。

五、本書編集の責任について

本書編集の責任は「南京戦史編集委員会」にあります。その最終責任は代表者高橋登志郎にあります。前述の通り本文は委員の共同著作であります。その内容に於て見解が分かれた時は、その裁定は私が行いました。

六、執筆、編集に関係された方々

南京戦史編集委員会の委員の方の当時の職名及担当された事項は左の通りであります。(敬称略)

氏名	期	南京戦当時の職名	主として担当した事項
加登川 幸太郎	(42)	陸軍大学校三年学生	本史全般の構想、史観
畝 本 正 巳	(46)	独立軽装甲車第2中隊小隊長	原稿、案文の執筆
土 屋 正 治	(46)	9 D、19 i、第4中隊長	9 D 関係
犬 飼 総一郎	(48)	16 D、19 i B 通信班長	16 D 関係、兵要地誌
鶉 飼 敏 定	(48)	6 D 通信隊小隊長	6 D 関係
春 山 善 良	(48)	11 D、11 P 小隊長	本書全般の調整、修補
松 岡 二 郎	(54)	予科士官学校生徒	資料の整理
板 倉 由 明			第三国情報特に国際委員会、その他内外の資料との照合、実証等

細 木 重 辰 (55)

全般の進行、編集、製作、注釈、年表

なお各委員はその担当のほか、お互いに監修、校閲に当たり、また資料の蒐集、解読、解説、注釈等にも当たりました。

委員九名のうち板倉氏は部外の方でありますが南京戦「南京事件」の研究家で、当初より私共に資料、情報を提供して戴いている方です。また委員以外の方で防衛研究所戦史部の原 剛氏より史料の面のみに止まらず、戦史の専門家として史実全般について適切な御協力を頂戴し、また退官後戦史の研究に専念しておられる、元統幕議長・

衣笠駿雄氏(48)から、細部に到るまで貴重な御助言を戴きました。

なおその他、左の方々の御協力を戴きました。(敬称略)

藤 江 義 一	(45)	鈴木弘道	(53)	常光定吾	(56)	豊嶋克之輔	(少23)
村 野 新 一	(56)	津野正夫	(56)	小出義夫	(56)	辻 奘児	(60)
石 光 浩	(60)						

また多くの部隊従軍者から貴重な資料、証言を戴きましたが芳名は省略させて戴きます。

最後に長い間貴重な時間を割かれ、御協力を戴いた前記委員及び其の方々、とりわけ部外の板倉由明氏、原剛氏の御協力に対し、責任者として心より厚く御礼申し上げます。

平成元年十一月